

グローバルマインドを培う広島大学附属東雲中学校の取り組み実績

— 東雲憲章を基軸に協働的問題解決をする教育実践を通して —

広島大学附属東雲中学校研究部

天野 秀樹 ・ 龍岡 寛幸

鈴木 悦子 ・ 藤井 朋子

西 勉

1. はじめに

広島大学附属東雲中学校（以下、東雲中学校と略記）が教育実践において大切にしてきたものは、「東雲憲章」である。

そして、2001（平成13）年より東雲中学校では、グローバル時代をきりひらく資質・能力の原動である「グローバルマインド」を培う教育を模索し、実践してきた。本稿では、国際交流活動、SMART（修学旅行をいかす活動）、教科等の授業、の3つの活動から協働的問題解決を通してグローバルマインドを伸長させる取り組みについて論述する。

2. グローバル時代をきりひらく資質・能力

OECD が「Definition and Selection of Competencies (DeSeCo)」においてキー・コンピテンシー（ライチェン、サルガニク、2006）を示して以来、21世紀を生き抜く資質・能力について世界中で議論されるようになってきている。

グローバル化に関して、中央教育審議会答申（2016）の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」では、次のように述べられている。

「グローバル化は我々の社会に多様性をもたらし、また、急速な情報化や技術革新は人間生活を質的にも変化させつつある。こうした社会的変化の影響が、身近な生活も含め社会のあらゆる領域に及んでいる中で、子供たちの成長を支える教育の在り方も、新たな事態に直面していることは明らかである。」

このことは、社会情勢の変化に応じた人間を育成する必要性を謳ったものである。

このようにグローバル時代を生き抜く人間の育成が社会的に要請されている中で経済産業省(2010)は、グローバル人材に必要な資質・能力として、社会人基礎力（アクション・シンキング・チームワーク）、外国語でのコミュニケーション、異文化理解・活用力の3点を挙げている。また、グローバル人材育成推進会議（2012）では、グローバル人材の定義について以下の項目を挙げている。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

以上のような経済産業省とグローバル人材育成推進会議の定義をみると、グローバル時代を生き抜く人間に必要な資質・能力はほぼ共通しており、国をあげてこのような資質・能力を培う方向性であることがわかる。

そこで東雲中学校では、グローバル時代をきりひらく資質・能力の原動となるグローバルマインドの伸長をめざし、総合的な学習の時間や教科等の授業を活用して、上述したグローバル人材の要素Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを網羅したカリキュラムについて協議を重ね、実践してきている。

3. 東雲中学校の教育理念

3-1. 東雲憲章を基軸とした教育実践

東雲中学校では、「東雲憲章」で謳われている精神を基軸にして、すべての教育実践を展開している。生徒たちがこの憲章をもとに教育活動を実践するときに、協働的に問題解決をする姿が現れると、本校では捉えている。

～ 東 雲 憲 章 ～

私たちは 東雲で学び合う者として この憲章をうたい 共に歩みます

- ー 自他の生命・人権を尊重し 心身ともに健康な生活を送る
- ー 人間・自然・環境・時間を大切にし 愛のある生活を送る
- ー 物事に真剣に取り組み 振り返ることによって みんなが 共に高め合う生活を送る

3-2. めざす生徒像

東雲中学校は、卒業時にめざす生徒像を「共生社会をたくましく生き抜く人間力豊かな子ども」と設定し、そのために必要な力を、次の3つとしている（広島大学附属東雲中学校, 2015）。

①多元的価値観を受容する力

社会の中で自分のよさを大切にし、お互いの違いを違いとして認めながら共に高め合う力

②表現・コミュニケーション力

様々な情報や意思、思想、態度等を正しく理解し受けとめ、
さらに自分の意見を論理的に伝える双方向的なコミュニケーション力

③意思決定力

課題が何かを的確に判断し、いくつかの解決方法案を考え、選択・決定する力

3-3. 協働的問題解決を通じた教育実践

協働的問題解決とは、2人以上の行為者が解に迫るために必要な理解と努力を共有し、解にいたるための必要な知識とスキル、労力を出し合うことによって問題を解決しようと試みることである(OECD, 2013)。本校では、生徒たちが東雲憲章を基軸に教育実践を展開するとき、協働的に問題解決をする姿が現れ、その結果、グローバルマインドが培われ、めざす生徒像に近づいていくという捉えである。なお、本校において「協働 (collaboration)」は、知識を学習者全体で構築することを重視する場合の用語であり、「協同 (cooperation)」は、知識を個人で構築することを重視する場合の用語と捉えている(溝上, 2014; グリフィンほか, 2014などを参照している)。したがって、学校教育における集団での学びを研究の対象としているため本校では、「協働 (collaboration)」の用語を使っている。

4. 東雲中学校の取り組み実績① ～国際交流活動

4-1. 国際交流活動について

東雲中学校では、2001(平成13)年よりアメリカ合衆国ノースカロライナ州の Exploris Middle School, 2007(平成19)年よりカリフォルニア州の Odyssey School, 2010(平成22)年よりインドネシアの MENDOYO 第4中学校と国際交流活動を行っている。毎年、これら3校から生徒数名が本校を訪れ、授業交流や文化交流、ホームステイなどを行っている。また、Exploris Middle School が来校する際には Shinonome 国際ミーティング、MENDOYO 第4中学校が来校する際にはフラワーフェスティバルでのパレードを行い、特色ある国際交流を展開してきた。さらに、毎年8月には本校からも6～8名の生徒が Exploris Middle School や Odyssey School を訪問し、日米文化の共通点や相違点を学んできている。

次の表1は、国際交流活動に関する主な年間スケジュールである。

表1 国際交流活動に関する主な年間スケジュール

時 期	内 容	備 考
5月 第1週	<u>MENDOYO SMP4 来校 (2日間)</u> ・文化交流活動 ・フラワーフェスティバルパレード合同参加	生徒4名 教師5名 来校
5月 第3週	<u>Odyssey School 来校 (3日間)</u> ・通常授業への参加 ・意見交流会 ・ホームステイ体験	生徒8名 教師2名 来校
8月 第3週 ～ 第4週	<u>Odyssey School 訪問 (3日間)</u> ・通常授業への参加 ・ホームステイ体験 ・フィールドワーク*1 参加 <u>Exploris Middle School 訪問 (1週間)</u> ・通常授業への参加 ・文化紹介活動 ・ホームステイ体験	生徒8名 教師2名 訪問
3月 第3週	<u>Exploris Middle School 来校 (1週間)</u> ・通常授業への参加 ・文化紹介活動 ・Exploris の教師による授業 ・ホームステイ体験 ・Shinonome 国際ミーティング*2 開催	生徒8名 教師2名 来校

*1 「フィールドワーク」は、Odyssey School が取り入れている教育プログラムの一つである。生徒がグループごとに様々なミッションを協働で達成していく内容である。これまでサンフランシスコの町中でのミッションを行っている。

*2 「Shinonome 国際ミーティング」は広島県内の公立中学校も招待し、各校生徒会のメンバーがそれぞれの学校活動の取り組みを紹介する。お互いの紹介を通して自校の良さや他校の良さを感じることができる。

東雲中学校の国際交流活動の特徴は、学校間の交流やホームステイなどを通じた異文化理解にとどまらず、Shinonome 国際ミーティングのように国境を越えて、それぞれの立場や状況を踏まえながら、グローバルな問題を考えていく教育活動を取り入れていることである。ここでは、質の高い異文化理解だけでなく、国際社会における日本のスタンス、ひいては、日本人としてのアイデンティティーをも必要とする。なお、昨年度より V-cube を取り入れるなど、ICT を活用して活動が促進されるように実践を展開している。

4-2. 実践の成果

アンケート調査の結果（浜岡ほか，2011）から東雲中学校で実施する国際交流活動は、グローバルマインドを培う一助になっていると判断できる。

平成26年3月に実施した Exploris Middle School 来校後に、本校生徒に実施したアンケート調査の結果によると、「英語を話せるようになることは自分にとって必要である」と回答した生徒が約8割、「言葉に関係なく誰とでもコミュニケーションをとれるようになることは自分にとって必要である」と回答した生徒は約9割いた。

これらのことから、東雲中学校の生徒は要素Iである語学力・コミュニケーション力の必要性を強く感じながら学校生活を送り、多くの国際交流の活動を行っている様子がうかがえる。

平成26年8月に Odyssey School と Exploris Middle School へ訪問した生徒へのインタビュー調査によると、「言葉に関係なく誰とでもコミュニケーションをとれるようになること」の重要性について、8名全員が「とても重要である」と回答した。このことから、実体験によりコミュニケーションの重要性を痛感している様子がうかがえる。また、平成26年3月に本校生徒に実施したアンケート調査の結果によると、「相手の国の文化や考え方をよく知ることは自分にとって必要である」、「日本の文化や考え方をよく知ることは自分にとって必要である」と回答した生徒は、ともに約7割いた。

これらのことから、東雲中学校の生徒は国際交流活動を通して要素Ⅲである異文化に対する理解の必要性を感じている様子がうかがえる。平成26年8月にOdyssey SchoolとExploris Middle Schoolへ訪問した生徒は、渡米の感想として次のように記している。

私はこの渡米中に、アメリカの生徒は自分の意見を貫こうとする意志があることを自身の目で見てきました。日本の生徒は他の人と異なる意見や考えをもつことに消極的で、自分が正しいと思っていることもひかえて大多数の意見に流されてしまう傾向にあると思います。しかし、今回お互いを認め合うという形は国や地域によって異なることがわかったので、日本の場合は信頼関係が存在すれば日本人として積極的に意見を出してもわかり合えるということを実感しました。

この感想から、渡米の経験が異文化に対する理解に加え、さらに、日本人としてのアイデンティティを強く意識する機会になったと解釈できる。実際にこの生徒は、平成26年10月に本校で実施した「渡米報告会」において、全校生徒に日本人としてのアイデンティティをもつことの重要性を主張する報告を行った。

東雲中学校で展開している国際交流活動は、Shinonome 国際ミーティングのように、それぞれの立場や状況を踏まえながら、グローバルに問題を捉える活動を取り入れている。そのため、渡米した生徒のみにとどまらず、全校生徒で協働して1つの問題を解決する実践を展開している。その基軸となる精神は東雲憲章であり、今後も全校生徒のグローバルマインドに働きかける本校の実践を継続していく。

5. 東雲中学校の取り組み実績② ～SMART（修学旅行を利用した取り組み）

5-1. SMART について

東雲中学校では、2013(平成25)年度より「東雲中学校(Shinonome)の生徒は、自らの使命(Mission)を自覚し、問題発見したことを現地で探究(Research)し、その過程において見通しをもった行動(Action)をとる修学旅行(Tour)―SMART―」を行ってきている。

これは、問題を発見し、その解決に向けて見通しをもち、仲間と協働してミッションを遂行していく力の育成を図った教育プログラムである。また、このSMARTは、旅行の行程を予算や安全性に考慮しながら自分たちでデザインする。したがって、必然的にプロジェクトマネジメント能力も求められる。例えば、野球部に所属するHくんは、部活動の際に手にするロジンバックの肌触りや臭いに関心を示したことから、人の体にやさしいロジンバックの開発をテーマとした。そして、紀州備長炭に着目し、現地での取材をもとに仲間と協働して新たなロジンバックの開発プランを作成するような一連の研究活動を行った。

リーダーシップ育成のための教育プログラムを実践しているシンガポールのTemasek Junior Collegeのように、東雲中学校では、グローバル社会のリーダー育成という視点も重視している。プロジェクトマネジメント能力の育成が期待できるSMARTは、グローバルマインドを培ううえで重要な位置づけとなる。次の表2は、SMARTに関する教育プログラムである。

表2 SMARTに関する教育プログラム

時 期	内 容
第1学年 前 半	自分の興味・適性について Pre Task Trip (広島市近郊)
第1学年 後 半	Pre Research Tourに向けた 研究テーマ・内容・方法の作成及び行程の計画 & 報告会
第2学年 前 半	Pre Research Tour (呉市近郊, 尾道市近郊ほか) 研究のまとめ・提案及び交流
第2学年 後 半	SMARTに向けた 研究テーマ・内容・方法の作成及び予備調査

第3学年 前半	SMARTに向けた 研究の再考・行程の計画
SMART (7月)	Task Trip・・・京都近郊で行うミッションが朝発表され、 それに向け京都に向かいながら行程を計画し、協働して遂行する。 Research Tour・・・紀伊半島を中心として各人の研究テーマを 遂行できるように、協働して現地調査を行い、探究活動を展開する。
第3学年 後半	研究のまとめ・提案 研究の報告・交流～成果発表会(全校)～

なお、SMARTに関する教育プログラムは、朝倉淳・池本よ志子・広島大学附属東雲中学校(2010)における新時代に協働して問題解決をする教育デザインの手法や鈴木敏恵(2006)氏が提唱するプロジェクト学習など、東雲中学校の教員が研修会を開催して、生徒への支援を充実させるように研鑽を重ね、その結果、できあがったプログラムである。

5-2. 実践の成果

今年度の全国学力・学習状況調査の生徒質問紙において、「総合的な学習の時間の授業で学習したことは、普段の生活や社会に出たときに役に立つと思いますか」という質問に対する結果は、次の表3のようになった。

表3 「総合的な学習の時間の内容は社会で役立つか」(全国学力・学習状況調査)

	1(当てはまる)	2(どちらかといえば、 当てはまる)	3(どちらかといえば、 当てはまらない)	4(当てはまらない)
本校	39.7%	43.6%	10.3%	6.4%
全国	26.0%	48.5%	18.7%	6.7%

また、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という質問に対する結果は、次の表4のようになった。

表4 「総合的な学習の時間ではPDCAサイクルで活動しているか」(全国学力・学習状況調査)

	1(当てはまる)	2(どちらかといえば、 当てはまる)	3(どちらかといえば、 当てはまらない)	4(当てはまらない)
本校	59.0%	29.5%	10.3%	1.3%
全国	18.2%	39.7%	30.1%	11.8%

以上の生徒質問紙の調査結果から、東雲中学校で実施しているSMARTの活動は、普段の生活や社会に出たときに役に立つという視点において、グローバルマインドを培う一助になっていると判断できる。さらに、昨年度のSMARTの活動後に、本校第3学年の生徒に実施したアンケート調査の結果によると、「自分の判断で行動する力に関する自信」に対して61%の生徒が肯定的な回答をした。また、「さまざまな考えを受け入れる柔軟性に関する自信」に対して62%の生徒が肯定的な回答をした。

これらのことから、東雲中学校の生徒はSMARTの活動を通して、要素Ⅱであるチャレンジ精神や柔軟性にかかわる自信を高めていった様子が見えてくる。

東雲中学校で展開しているSMARTは、全学年において組織的・計画的・継続的に協働して問題解決をするプログラムが設定されている。その基軸となる精神は東雲憲章である。また、タブレットを取り入れるなど、ICTを活用して活動が促進されるような実践をはじめ、今後もさらなる内容の充実を目指して、本校の実践を継続していく。

6. 東雲中学校の取り組み実績③ ～東雲授業づくりプランⅡに向けて

東雲中学校と東雲小学校では、2010（平成22）年度より「小・中学校9年間の学びがつながる授業づくりのあり方」を研究主題として、小・中学校教員が協働して実践的研究を行ってきた。9年間の各発達段階をふまえた知見は、昨年度、東雲授業づくりプランⅠとして東雲教育研究会において提示した（広島大学附属東雲中学校, 2014）。

本年度より東雲中学校と東雲小学校では、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を培う教育の創造ー協働的問題解決ができる子どもの育成をめざしてーを研究主題に掲げ、引き続き小・中学校教員が協働して実践的研究を行ってきている。そのねらいは、各教科等で日々行う授業においても協働的に問題解決ができるようにする視点から、すべての教育活動を通して子どもたちのグローバルマインドの伸長に寄与できるようにすることにある。

今年度は、各教科等で「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育成する授業を実践的に模索することを通して、グローバルマインドを伸長させる授業デザインを構築することに取り組んでいる。そのために、われわれは、昨年度より小中合同研修会や先進校視察、日々の授業交流や授業研修会、ワークショップや講話などへの参画、広島大学の先生との協働や教科等での協議会、研究代表者会や研究ワーキングなど、数々の研鑽を重ねてきている。最終的には、9年間の各発達段階をふまえた「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育成する東雲授業づくりプランⅡの提案をめざしている。

7. おわりに

本稿では、東雲憲章を基軸として東雲中学校がこれまでに実践を積み重ねてきたグローバルマインドを培う教育活動を報告した。その活動は、国際交流活動、SMART（修学旅行をいかに活動）、教科等の授業、の3つの活動である。これらの活動は、どれも協働的問題解決を通してグローバルマインドを伸長させる取り組みであり、東雲憲章の精神が根本にある。これからも地域、日本、世界で積極的に挑戦し活躍できる人間を培うために東雲中学校の実践を継続しながら、発展させる。

【引用・参考文献】

- 朝倉淳, 池本よ志子, 広島大学附属東雲中学校: 問題解決の基礎的能力を育成する新時代の総合的な学習, 溪水社, 2010.
- 中央教育審議会答申: 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について, 2016.
- グリフィン, マクゴー, ケア: 21世紀型スキルー学びと評価の新たなカタチー, 北大路書房, 2014.
- グローバル人材育成推進会議: グローバル人材育成戦略(グローバル人材育成推進会議 審議まとめ), 2012.
- 浜岡恵子ほか: 中学校における国際交流の在り方ーExploris Middle School・Odyssey School・MENDOYO SMP4との交流を通してー, 広島大学学部附属共同研究紀要第40号, 59-64, 2011.
- 広島大学附属東雲中学校: 小・中学校9年間の学びがつながる授業づくりのあり方, 東雲教育研究会実施要項, 2014.
- 広島大学附属東雲中学校: 「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を培う教育の創造ー協働的問題解決ができる子どもの育成をめざしてー, 東雲教育研究会実施要項, 2015.
- 溝上慎一: アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換, 東信堂, 81-101, 2014.
- OECD: PISA 2015 draft collaborative problem solving framework, 6-8, 2013.
- ライチェン, サルガニク: キー・コンピテンシーー国際標準の学力をめざしてー, 明石書店, 2006.
- 産学人材育成パートナーシップ〜グローバル人材育成委員会: 報告書〜産学官でグローバル人材の育成を〜, 2010.
- 鈴木敏恵: ポートフォリオ評価とコーチング手法, 医学書院, 2006.